
とある男の話

出水 深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の話

【コード】

N3119P

【作者名】

出水 深

【あらすじ】

とある男の話。

短編の小説です。

「結婚するということは、男が負ける時だ。」ある本で目にした言葉だ。

確かに、その通りかもしれないな、と思ったりもする。

今年で、結婚6年目になる。

最初に出会ってから、9年くらいか。確かなことはよく覚えていない。

だけど、明らかに昔とは態度が変わった。面白いことだが、女性というものはそういうものなのだろう。きっとそうだ。

ふと、窓から外を見ると雪が降っていた。

僕達が住んでいるマンションは五階にあって、外の景色を遮るものはない。天気が良ければ、遠くの都心の灯りがとても綺麗に見える。まとまりなく降る雪は、どこか寂しげに見えた。

それらをぼんやりと眺めるだけで、温かい部屋も寒く感じてくる。

「ちょっと。ご飯の用意を手伝ってくれない？」台所から声をかけられた。

僕の奥さんだ。

「わかった。今、行くから。」ソファから立ち上がりながら、返事をする。

外の景色への興味を消すために、カーテンをしめた。

揺れているカーテンは、本来の仕事にもどれて嬉しそうに見える。

料理を手伝うのは僕の日課に近い。仕事が遅くなければ手伝う。

僕が決めたのではなくて、もちろん、奥さんがきめたことだ。

結婚をしてから、仕事帰りの飲み屋への立ち寄りがなくなった。

他にも、いろんなことに制約がかかるようになった。

例えば、昼に食べていた定食屋のランチが食べられなくなったり、同僚の女性にも気を配るようになったりなど。

要は、少し動きづらくなったということだ。

「君は、僕と結婚してよかったと思っている？」と、前に聞いたことがある。

その時、彼女は満面の笑みで一言、「よかったわ。」と言った。

その顔が今でも忘れられない。

思い出すだけで気分が良くなる。

ジャガイモの皮を苦勞して剥いている横顔を眺めながら、僕はニンジンの皮をむく。

顔のラインを目でなぞってみる。この近さでないと見えない。たまに冷たいニンジンにも、目を向けてあげたりくらいはする。

「なに？」彼女は、僕の視線に気づいたようだ。

「あつ、いや、なんでもないよ。ニンジン剥き終わったけど、どうすればいいかな？」僕は慌てて言った。

「もう終わったの？だんだん上達してきたわね。そこに、置いといて。」

「わかった。で、次は何を？」僕は言った。

少し彼女は考えた顔をした。

「じゃ、もういいわ。休んでいて。ありがと。」考えた結果、調理の役割はもらえなかったようだ。

賢明な判断だと思う。僕はあまり料理が上手ではないからだ。手伝うようになって、一般レベルの一手手前になった。

仕事を失った僕は、またソファに戻った。
さつきとは違って、カーテンが閉められている。
寂しげな雪も、寒々しい夜の外も関係がない。

耳をすませば、彼女の包丁の音が聞こえる。

軽快なリズムが僕を心地よくさせる。

「結婚するということは、男が負ける時だ。」と書いた人は、きっと相手が悪かったのだろう。

結婚は確かに制約されることが多いが、その分素晴らしいこともある。

いつも、ささやかな時にそういったことを感じる。

例えば、台所で料理している音を聞いているときとか、満員電車の喧騒から帰宅して、玄関で迎えられるときとか。

誰かが自分のそばにいてくれる、いることの実感を感じる時にそう思うのだろう。

普段からずっとそう思うわけではない。

ふとした時にそう思うのだ。

世の既婚男性は、そのささやかな行動の会話を聞くことを忘れてはいけない。

これは昔、誰かに言われた言葉だ。

例えば、ロック調の音楽が流れていたとしても。

そして、そばにいたことが一番の会話であって、一番心地よいことだと僕は思う。

太陽にとっては月が、温暖前線には寒冷前線が、男には女が、といった具合に何かそばにいる。

明るければ、月の存在を忘れかけて、暗ければ太陽が恋しくなる。

全て、そんな関係なのだ。

僕なら、「結婚するということは、男が試される時だ。」と言っだろう。

そして、愛する人と食べるご飯は格段に美味しいものだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3119p/>

とある男の話

2010年12月5日09時26分発行